

国立国会図書館蔵『百鬼夜行絵巻』（詞書付）について

古賀, 秀和
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8950>

出版情報：文献探究. 44, pp.1-12, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

国立国会図書館蔵『百鬼夜行絵巻』（詞書付）について

古賀 秀和

○

『百鬼夜行絵巻』は器物の妖怪が夜行し、明け方を迎え退散する姿を描いたものである。

『百鬼夜行絵巻』の伝本は国内外に二十本以上ある。もっとも有名なものに大徳寺真珠庵蔵本があり、絵は繊細、彩色も鮮やかで、美術的価値が高く、重要文化財に指定されている。

しかし、詞書を有する伝本は稀で、従来はニューヨークパブリックライブラリー所蔵スペンサーコレクション本のみが知られていた。ところが、これ以外にも詞書を有する伝本がある。それが本稿に取り上げる国立国会図書館蔵本である。

国会図書館には二本の『百鬼夜行絵巻』が所蔵されている。一本は真珠庵本ともかなり似ており、広く知られている。これが一般的に国会本と呼ばれている本である（以下、国会A本と呼ぶ）。国会A本は『新編帝国図書館和古書目録』（注一）・『国書総目録』にも記載がある。そして、もう一本が詞書を有する本である（以下、国会B本と呼ぶ）。国会B本は『新編帝国図書館和古書目録』に記載はないものの、『国書総目録』には名前が挙がっている。また、現在最も詳しい伝本研究である小林法子氏の論文（注二）において、国会A本のこととは述

べられているが、国会B本は存在も指摘されていない。美術分野において、『百鬼夜行絵巻』で重要視されているものは、真珠庵本であり、それに似ている伝本である国会A本が多く用いられ、国会B本はどういうわけか注目されなかった。

黒川真頼の『訂正増補考古画譜』（注三）には次のような記述がある。

百鬼夜行図 一卷

土佐権守経隆筆 近衛家所蔵、

〔補〕本朝画図品目（注四）云、一種の百鬼夜行、近衛家にある、至て筆_ばその者なり、経隆の画なり、

画後云、正和五年六月一日、以内蔵寮本三日の間寫之了、従五位下藤原経隆、

躬行曰、経隆は、中務少輔隆親男にして、顯文抄（注五）に承安中の人とせり、此奥書の正和より、承安に遡るに、まさに百四十年、甚疑ふべし、然るに於陽明家柏木政矩原本を展看し、この奥書直に謄寫し来る処、于時明治五年壬申五月なり、

〔補〕真頼曰、百鬼夜行一卷、摸本博物館にあり、

〔補〕四郎曰、今帝室の御物となれりと聞けり、

今までこの一卷は散逸していると考えられてきた。田中貴子『百鬼夜行の見える都市』のなかで「現在は失われているが真珠庵本よりさらに遡る絵巻の存在が知られている。」と述べられ、『訂正増補考古画譜』の経隆筆本を挙げている。『訂正増補考古画譜』に、この経隆筆本には「正和五年六月一日、以内蔵寮本三日の間寫之了、從五位下藤原経隆」と、奥書の存在が指摘されている。国会B本の奥書には「正和五年六月一日以内蔵寮粉本三日之間寫之了從五位下藤原経隆」とあり、『訂正増補考古画譜』に記されている奥書と若干違うものの、このことより国会B本が土佐権守経隆筆『百鬼夜行図』、もしくは経隆筆の模写本の可能性があることが言える。『訂正増補考古画譜』の注に「百鬼夜行一卷、摸本博物館にあり、」今帝室の御物となれりと聞けり、とあるが、前述の小林氏の伝本研究によるとこの奥書を持った伝本は他にないことがわかっていいる。藤原経隆は鎌倉時代前期の人物で『尊卑分脈』によると画所預蔵の家系であり、中務少輔藤原隆親の子である。『扶桑画人伝』（注六）によると建仁年中に紫宸殿の賢聖障子や『小野雪見御幸絵詞』を描いたことがわかる。

従来から知られているスペンサー本（辻英子編『日本絵巻物抄付石山寺蔵』による）は絵と詞書が交互に出てくるが、この国会B本は絵の前にすべての詞書が見られる。詞書の天地それぞれに装丁の過程等により切った跡があり、部分によっては文字が切れている箇所がある。また、絵上部に針で刺したような跡も見られる。スペンサー本の絵は繊細であるのに対して、国会B本の絵は大雑把に描かれている。『訂正増補考古画譜』に「至て筆ぼその者なり」とあるように美術的にも

優れた作品とは言い難い。



図一



図二

国会B本の構成は、第一紙から第二二紙までが詞書(図一)である。詞書の大まかな内容は、治承の末の年、何某の中納言の屋敷が舞台で、都遷りのためにその屋敷を預かる老人とそこを訪れた客人が会話していくうちに夜更けになる。そこで百鬼夜行に出くわすというものである。第一三紙に空白があり、第一四紙から絵が始まる。第一四紙にはスペンサー本にもある翁と客人の対話の場面(図二)が見られる。彩色はスペンサー本と同じであるが、スペンサー本と絵の構図が異なっており、線も細い。詞書の第一紙から第四紙までがこの翁との対話の部分と次の扇と匙の妖怪が走り出るといふ絵に対応している。第一五紙には扇・匙(図三)の妖怪が登場する。これもスペンサー本と同じであるが、スペンサー本ではもう一度この扇と匙の組み合わせが登場する。国会B本ではこの冒頭の場面のみが登場である。また、スペン

サー本では紙継があつて百鬼夜行が描かれるのだが、国会B本では場面分けもされずに唐突に百鬼夜行が描かれ始める。これ以降国会B本とスペンサー本の妖怪登場順が異なる。



三 図



四 図

第一六紙では扇と匙の場面の続きの場面、襖や燈台が描かれ、扨子そして真珠庵本で言うところの紺布が描かれる。真珠庵本・スペンサー本では紺であるが、国会B本では白色である。

第一七紙には袋を持った猿女と狐女が、第一八紙には白布が描かれる。詞書・第六紙の「うす衣かつきたる女のすかた」とはおそらくこの袋の猿女か狐女であろう。この辺りには彩色の差異は見られないが、国会B本だけの特徴が見られる。それは猿女の向きが逆に描かれている点である。真珠庵本では左を向いているのに対して、国会本Bでは絵巻の進む向きと逆の右を向いている。また、白布の妖怪が国会B本では日の丸の扇を持っている。このことはスペンサー本は勿論真珠庵本系統すべてに見られないことである。

第一八紙・第一九紙に几帳から覗く女が若干簡略化されて描かれるが、詞書では語られていない。第二〇紙には鉄漿女とその顔を映す鏡の妖怪、小鈴を持つ鶴が描かれる。鉄漿女と鏡の組み合わせにも真珠庵本系統に見られない特徴が国会B本には見られる。鉄漿女が鏡を覗き込む絵(図四)であるが、国会B本では鏡の中に鉄漿女の顔が描かれている。これらの国会B本のみに見られる特徴は、模写した人物の独断で描かれたものであると考えている。鉄漿女と鏡のことは詞書・第八紙に「六尺はかりの大きなかゝみ」とそれに映る顔として語られる。

第二一紙には釜・浅沓・鰐口、第二二紙には大幣、第二三紙には小桂の犀・鳥兜・琴が描かれる。このあたりはスペンサー本とも特に違う点はない。第二三紙から第二四紙にまたがって琵琶が描かれ、その後には妖怪が描かれるが、その妖怪の持つ道具がスペンサー本と違う。スペンサー本では錫杖であるのが、金剛杖のようなものに代えられている。第二五紙には真珠庵本にも描かれている葛籠と熊手が描かれる。ここで詞書と絵の対応が前後する。

第九紙には「ゆふしてのおほぬき」「おとめのすゝ」「てうせし釜」という妖怪が詞書に見られる。これは大幣・小鈴の鶴・釜に対応している。そして「さまくあやしきものかれこれ」と具体的に語られていないが、絵の配置から見て浅沓・鰐口に当たる。第一一紙に語られる妖怪は「ひはこと(琴・琵琶)・「笙のかたちあるもの(錫杖の笙)・「とりかふと(鳥兜)・「おほきなるふるきかわこ(葛籠)・「大きなくまの手(熊手)である。

第二六紙には赤ノツペラボウと播鉢の天秤が描かれる。第二七紙には傘、第二八紙は草鞋、第二九紙では旗を持つ妖怪が描かれており、

スペンサー本や真珠庵本では旗は赤であるのに、国会本Bでは白である。明け方になり日の光に退却している様子をあらわしているようである。詞書は第一二紙と対応しており、草鞋を筆頭に「めなれぬあやしきもの」赤色のノツペラボウ「仏く雑具」天秤の挿鉢・傘・釜の蓋・鎮子などを引き連れて闊歩すると語られている。

第三〇紙では夜明けの場面と切り替えるためか空白の紙が挟まれている。第三一紙には最後の場面から逃げる妖怪、第三二紙・第三三紙には太陽の場面がくる。また第三三紙の絵の後に奥書が書かれている。

国会B本では詞書に対応した妖怪のみが描かれている。国会B本は登場する妖怪の種類から真珠庵本系統に属しているが、真珠庵本系統に見られる「唐櫃を開ける赤鬼」が国会B本には描かれていない。これも国会B本のみに見られる特徴である。国会B本は真珠庵本やスペンサー本より描かれた妖怪が少ない。つまり、詞書に見られない余計な妖怪の絵を削除して、物語に即したように妖怪の絵を組替えていると考えられる。

詞書の内容をスペンサー本と比較したところ、二つの伝本において話の筋はほぼ同じである。しかし、細かい異同が多く、なかには表現が大きく異なる点も見られる。以下、異なる点を列挙していく。国会B本は「家ぬのありさま」などを細かく述べ、何某の中納言の加階等の状況についてスペンサー本より詳しく述べている。スペンサー本では「棟門かたふきつあちのさまもあらはなり」の部分がない。また、「近衛川原の大宮殿に住んでいたがここにきた」という話の件で、スペンサー本では少し詳しく都遷りで住処がなくなることまで述べられている。

百鬼夜行の場面（国会B本第六紙から）から大きく異なってくる。

屋敷の奥より走り出た妖怪の姿や几帳の影より覗く様子の表現が国会B本には欠けているが、スペンサー本では「いてたるものゝさまはすかた女めきたれともかほかたちゑもいはれぬおそろしきもの也なを奥のかたにもしはひたる女の聲にてせゝわらふこゑ耳のもとにきこえけるゆへ其方を見やり侍れはきちやうのかけよりゑしれぬかほにてうそくさしのそきけるさま見るに身のけもよたちて」と詳しく述べられている。

また、国会B本の「うはかれたるこゑにて一ふしのうたをかなてける」（第六紙）の部分が、スペンサー本では「うはかれたる聲にてひとふしをうたひける」とあり、詞書に異同が見られる。妖怪を見たときの恐怖の表現も違い、国会B本では「おそろしき骨髓にとをりておほえける」（第七紙）、スペンサー本では「おそろしさいはむ方なく」と似たような事を述べていても伝本によって大きな違いが見られる。

鉄漿女が鏡に映した顔の様子（国会B本第八紙）をスペンサー本では「そのうつれるかほあかくなりあをくなりあるひはいかり又はうちわらひなきなどあらぬわさともなりしかともよのつねに見るへき人はあるましきやうにおほへける」と細かく表現しているが、国会B本ではその部分の詞書が落ちている。また、鉄漿女を映した鏡の寸法が六寸（国会B本）と八寸（スペンサー本）とで異なっている。

楽器の音が聞こえる場面の前にスペンサー本では、百鬼夜行に出会った人が「こはいかにおそろしき事のはてななきなをいかなる事にや」と考えるが、国会本Bにはこの部分が見られない。そして、スペンサー本に「猶其跡には説教誦文などゆゝしきわさと見えひとへに仏事をいとなむかとおほえけるあるひは聲明の禮讚おろそかな

らす仏幡天蓋やうの物さしておくの方へいりぬ」とあるが、「説教誦文」や「聲明の禮讚」なども国会B本には見られず、「仏幡や天蓋のような物」を持った妖怪も詞書には登場しない。

他にも国会B本には皮葛篋から這い出てくるものの描写が簡略化されており、スペンサー本には「聲をたてなきいかみなどしてうへになり下になりはしりまはりてのちみなことくくかはこのうちにいりはへりければ」とあるが、やはり、国会B本にはこの箇所が存在しない。

国会B本は何某の中納言の素性或館の描写がスペンサー本に比べて細密である。しかし、肝心の百鬼夜行の様子描写が簡略化されている、などの点が国会B本には見ることができる。

以下国会B本とスペンサー本との詞書の異同を示し、併せて国会B本の書誌を記す。

○

【本文】国会図書館B本

【対校】スペンサー本（辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』による）

〔第一紙〕

治承のすゑのとしかとよ中のみかとのみなみの辺朱雀のにしのかたに

・御門・南・

何某の中納言とかやすみ給へる御館あり家ぬのありさまはつきくし

き程・には見え侍れともよふりにしあとにて棟門かたふきつあちの
ほと 跡・

さまざまあらはなりこの何某もとは官加階よろしきまでに物し給へる
にや侍れといつとなく時のおほえもうとくてすみあらしたる家居のさ
ま雨の日のつれつれものうく月の夜はさらても昔をしのふよすかとそ
なりにける
たすみあらしたるありさまなり

事としておほうちは

〔第二紙〕

いふにおよはす貴賤のともから・心くるしきのみにてつみにみや

及・

こはなには津

難波・

〔第三紙〕

のむかしのあとにたちかへりいまのみやこはあれはてゝ人の家あもの
跡・立・都・残

これるかたはすくなく世にあひて上につかへ

時

〔第四紙〕

るともからはみなつきしたかひ奉・り時・をうしなひてよにわひ

たてまつ とき

世

ぬるものはみやこにとゝまり侍りぬされはそのゆへにやこのなにかし

都・

・

も・みやこのすまゐ・物さひしく・伏見の郷にする

・いまの

住居・も

このなにかしも

へありて御たちをは家久・しき翁にまかせをきていて給へりある人い

有・御館・

ひさ

あつけ

さゝかたつぬる事有てとふらひ侍りしに翁は・

・

て此 のかたへとふらひけるに

れはてたる御たちにたゝひとりのみ有・ければいとよろこひて物かた

い 御館・

あり

・

りなど・ねんころに・て日もくれかたになり侍・りしかはいき
いと きこえ れ・

・かへりなむといふに翁いひけるはよしやかたる事もつきしあすまで
は

はとなむいひてひたすらにとゝめければ心にまかせ・ぬふけ行まゝに

と したかひ 更・

翁・はまどろみ侍れとつやくめもあはて有しにうしみつはかりに

おきな

家の

〔第五紙〕

うち・物すこくおほへしにおもてのかたよりあやしき聲して・

なとや覽

方・

にそ

・あるひは又おくのかたよりも聞なれすおそろしけなるあし音にて誰

と

方・

にやといらへ侍・りていつるを見侍れはおそろしきものゝかたちなり

はへ

〔第六紙〕

はしめあやしけなる聲しけるものいひけるはそれかしいまゝては近衛

かはらのおほみやとのに有けるかかしこも人しけくすみうきまゝ
河原・大・宮・殿・ しか・

ろの都うつりにてみなわれくか栖もなくなり侍るゆへ住所もとめ

ほしくゝ・この所きたりぬ・となむいひければうちのかたよりのすま
ほしくゝ・ 内・方・物・

こき聲にていくらともなくはしりいてよくこそき・ぬるものかなと
たり

よろこはしけにまろひまかりていひいつるをみれば異類異形の
い 見 あやし

ものなりあまりのおそろしさにいきをもせてお侍て
き 也・ に ・りししはらく有

て家のうちしきりになり侍にいかなる事かはと
その有さまをともし火

のかけによくく見侍れば又うちのかたより
影・ 内・ いてたるものゝさまはす

かた女めきたれともかほかたちゑもいはれぬおそろしきもの也なを奥

のかたにもしはひたる女の聲にてせゝわらふこゑ耳のもとにきこえけ

るゆへ其方を見やり侍ればきちやうのかけよりゑしれぬかほにてうそ

くさしのそきけるさま見るに身のけもよたちてさらに心地もたゆる

はかりにおそろしき事やおそろしき事やあらんとむねうちさはきける

にまた上のかたにうはかれたる聲にてひとふしをうたひけるこれも聞

なれぬおそろしき聲にてしたひに近くきこえけるゆへめもはなたす其

・ ・ ・ ・ ・ うす衣・ かつきたる女のすかたにてそのあし音あらゝか
かたをみれば きぬ 姿・ ・

にて家のうちもゆるくはかりにそ有けるうはかれたるこゑにて一ふし
・ 中・ ・ ・ ・ ・

のうたをかなてけるその・ ・ ・ こと葉・ ・ われと心はこひする人よ月の
・ ・ ・ ・ ・ 其・ 哥の詞・ ・ には我・ も に

・ ・ 夜ころはいとはれて闇・ にきまさむ人うれしたとひ心はすゑとを
ある ・ ・ やみ

らすのあたし男といみし

〔第七紙〕

きひとすかた心にへたてはなきそいてこむ人のいのちとらはやとう
人・ ほたされはせしい

たひける聲・ ・ しはひ・ おそろしき骨髓にとをりておほえけるにこゝ
から・ ・ て ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・ かしこのものかけ・ ・ ・ ・ ・ よりいろいろのあ
いはむ方なく有しに ・ ・ ころの櫓の下 く

やしき聲・ にてとつとほめ・ ける

こゑ に

〔第八紙〕

かくてあまりのおそろしさにありつる翁をおとろかし侍れともいとよ

くねいりける・ ・ ・ ・ ・ にや・ ・ ・ ・ ・ めをもさまして侍れはいと心せき
・ ・ ・ ・ ・ てはへる へをら

てもあしもうちなえて聲・ をたてなむとせしかともいてすいかゝせ
こゑ ・ ・ ・ ・ ・ するに・ ・ ・ ・ ・

・ ・ むと思ふ・ ・ ・ ・ ・ うちにきらめきわたるものあり見れば・ ・ ・
け ・ ・ ・ ・ ・ にまた家の ・ ・ ・ ・ ・ を ・ ・ ・ ・ ・ わたり

六尺はかりの大きなかゝみ・ ・ ・ 内・ のかたよりまろひきたるをみれ
八 ・ ・ ・ ・ ・ の面おく 方・ 来・ 見

はそのかゝみにひとしき女のかほはせのおそろしけなるを・ ・ ・ ・ ・ う
其・ 鏡・ ・ 鏡の中に

つせりこはいかにとおもひうしろのかたにかへり見ればそのかほはせ
思・ ・ 其・

の女匪盥にむかひ鉄漿くろくふくみし口もとにて完尔とわらひける・
かね あ

・さま

り

〔第九紙〕

・ ・ ・ ・ たましひもきゆるはかりにそおほえける ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
見るに心 覚 ・ かのちはそのうつれ

・
るかほあかくなりあをくなりあるひはいかり又はうちわらひなきなど

・
あらぬわさともなりしかともよのつねに見るへき人はあるましきやう

・
におほへけるかとかくする ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
きえ

ぬ其後又おそろしけなるものゆふしてのおほぬさととりてふりたてく

上にあふきちにまろひた・るさまきねか手むくるのつと・・やうのわ

地 侍 向 ・ など

さにやさまくあやしきものかれこれ ・ ・ ・ ・ ・ いてあひておとめの ・ ・

ともに 袖の

すゝの音とりくにしらへぬる太こ神に手向・るゆのはなしはしかな
鞞 たむく

てゝはてはゆのはなにてうせし釜もうちかつき太こもおれとまろひ

調 ・ 鞞

て

〔第一〇紙〕

ゆくかたなく・なりぬ

方・しらす

〔第一一紙〕

・
こはいかにおそろしき事のはてもなきなをいかなる事にやと見るうち

・ 又はしありて楽器の音しきりにきこゆとおほえしか程もなくひは
に ・
聞 ・ 琵琶

こと ・
のかたちあるもの 形 ・ ・ すかた 又

おそろしけなるものはらつゝみを鞞鞞としなしてまひかなてぬれはと

りかふとやうのものはうへにひるかへりてめなれぬおそろしきことは

も及・ひかたし

をよ くそ侍りける猶其跡には説教誦文などゆゝしきわざと見

えひとへに仏事をいとなむかとおほえけるあるひは聲明の禮讚おろそ

かならず仏幡天蓋やうの物さしておくの方へいりぬ 所・

たおほきなるふるきかわこなどのやうのもの天井の

は いたしきの

りおとしぬその音ひとへにいかつちといふともこれ程にはと思ふ

其・

につけてまたいかなるおそろしき事もやなす覽とまほりあるにほと

もなく・かはこのうちよりくらひさきつかみやふりてゑもしれぬ

さる

おそろしきものいくらともなくはひいて・あるひは
かすもしれず・ 聲をたてなきいか

みなどしてうへになり下になりはしりまはりてのちみなことくく

はこのうちにいりはへりければ又かはこのうちよりおほ

手のことき・ものいてこれもおくのかたへまろはしける
やうなる をさしいたして内・ さるにて

もおそろしき事のあるかきりをも見はてぬるよとすくせのことまで思

ひやられ侍るに

〔第二紙〕

さてそののちは草鞋にめくちつきたるもの竹馬にのりむちうつて

・いつるこれにつきそひてめなれぬあやしきものあるひは仏く雑具

ゆみ 具

なとかたちあるもの列をひきてかなたこなたと・めくる程に夜も

うち

はやくあけなむかゝる多きもなき所・へきたりておそろしきめをも

ところ 来・

みる事よと悔しき事かきりなし・

・

にもやあらんすらむとおもふ時・おくの方より一とつとときの聲

・

をあげること・

多

しき聲・にてすはや我・ためにかひをなす事こそあれとてあはたし

こゑ わか

くにけまとふありさまひとへにいくさの

やふれたる 旗・

け・

うちふせ まとひ

のゝめのそらとそなりにける

《書誌》

国立国会図書館蔵『百鬼夜行絵巻』

請求番号 す・138

木箱入 (縦三一・七糎×横六・八糎×高六・六糎)

題簽 百鬼夜行絵巻 (縦一六糎×横二・九糎)

江戸中期写 絵巻 二六糎×八九二・一糎

外題 金色紙無表記 (縦一六・九糎×二・四糎)

内題 百鬼夜行絵巻 (縦一三糎×横一・九糎)

料紙 楮紙

紙数 全三三紙

詞書 一二二行

奥書 正和五年六月一日以内蔵寮粉本三日之間寫之了従五位下藤原経

隆

蔵書印 見返し 国立国会図書館 (朱・陽)

受入印 見返し 国立国会図書館 3・2・2・16 U53856

見返し 三五・七糎

第一紙 詞書 一三行 三三・八糎

第二紙 詞書 二行 四・二糎

第三紙 詞書 三行 六・六糎

第四紙 詞書 一七行 三六・二糎

第五紙 詞書 六行 一一・二糎

第六紙 詞書 一八行 三五・五糎

第七紙 詞書 五行 一〇・三糎

第八紙 詞書 一三行 二四・六糎

第九紙	詞書 一〇行	一八・八種
第一〇紙	詞書 一行	一・七種
第一紙	詞書 一七行	三三種
第二紙	詞書 一七行	三四・八種
第三紙	空白	七種
第一四紙	翁との対話	三七・五種
第一五紙	扇・匙	三八・七種
第一六紙	弘子・紺布	三三・九種
第一七紙	猿女・狐女	二三・三種
第一八紙	白布・几帳から覗く女	三九・一種
第一九紙	几帳から覗く女	一〇・三種
第二〇紙	鉄漿女・鏡・小鈴の鶴	三八・一種
第二一紙	釜・浅沓・鰐口	三九・一種
第二二紙	大幣	二〇・九種
第二三紙	小桂の犀・鳥兜・琴	三四・七種
第二四紙	琵琶・笙	三九・一種
第二五紙	葛籠・熊手	三一・二種
第二六紙	赤ノツペラボウ・天秤の播鉢	三四種
第二七紙	傘・釜の蓋	二九・三種
第二八紙	草鞋	三九・一種
第二九紙	旗・弓矢	三九・一種
第三〇紙	空白	七・二種
第三一紙	逃げる妖怪	三八・三種
第三二紙	太陽	三八・二種
第三三紙	太陽・奥書	二三・八種

注

- 一 『新編帝国図書館和古書目録』昭和六十年十月十五日発行
- 二 小林法子「守房筆百鬼夜行絵巻」(『デ・アルテ』十三号 一九九七)
- 三 『黒川真頼全集』第二巻 明治四十三年四月二十日発行。黒川春村が記したものを古川躬行が編集したものが『考古画譜』であり、それに春村の養子である真頼が増補したものが『訂正増補考古画譜』である。本文中の注に見られる「四郎」とは、帝國博物館に勤務していた片野四郎(明治四十二年没)で、絵画の鑑定に詳しい人物である。
- 四 『本朝画図品目』国立国会図書館蔵本(写本)・東京都立中央図書館加賀文庫蔵本(天保五年版)にはこの記述は見られない。九州大学文学部蔵本(写本)には「百鬼夜行図 壺巻 経隆筆 御物」とある。
- 五 国立国会図書館蔵『養徳錦頭文鈔』「経隆 按承安頃 姓藤原従五位下土佐権守 従五位下中務少輔隆親男 (尊卑分脈)」
- 六 九州大学文学部蔵『扶桑画人伝』

【付記】

本稿は、平成十七年六月五日、九州大学国語国文学会での口頭発表をもとに纏めたものである。その折御教示くださった中野三敏先生、ならびに資料の閲覧・調査に便宜を図って下さった国立国会図書館、東京都立中央図書館に対しお礼申し上げます。

(こが ひでかず・九州大学大学院博士後期課程)